～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信不定期便

Vol.16
2024年2月号
発行：地域福祉室

ギャア！と叫ぶおたけびのなかにメロスの愛はある
～略してGyaross（ギャロス）～
２月１９日第一回目勉強会の様子を紹介します

【R6年2月テーマ】　ジレンマが生まれる患者・利用者の諸問題（3回セット）
Part.1　医療従事者の立場より　　事例提供：病棟看護師Mさん

～看護師としてどの患者さんも一つの個性として受容していきたい～
豊かな感性、看護を探索し続ける看護師Mさん

事例は元気の出る看護・介護事例検討会でMさんが発表されたものです。事例にはMさんが発達障害（疑）のある患者との関わりを通して感じた様々な葛藤が綴られます。『患者の個性を認めることについて』というサブタイトルには、Mさんの深い思いが潜んでいました。

Mさんは理解しがたい日々のAさんの振るまいに対処しながら「目の前のことだけを解決していたらその時は済むけど、翌日もそのことが繰り返されて永遠にその時だけが過ぎていく、なぜこんなにストレスを感じる自分がいるのか」という疑問を感じます。そして退院後には大きなモヤモヤだけが残ります。Mさんにそのモヤモヤの詳しい内容をうかがうと「良い言葉が見つからなくて言葉は悪いかもしれないけれど、私は基本的に患者さんはみんな普通の人として接しなければならないと思っている。でも、Aさんには毎回葛藤が強く、どうすればよかったのかとモヤモヤした気持ちが残った」ということでした。しかし、私はこれこそ“どの患者さんにも、みんな同じ人間として、それぞれの個性を尊重していきたい”というMさんの看護観だと感じることができました。

そしてMさんは情報共有の重要性について話します。「Aさんの退院にあたり外来看護師への申し送りをするのに、病棟師長から『Aさんが病棟看護師を色んなことで困らせた事実がAさんにとって先入観や不利益なかたちで伝わらないように努めた』という話を聞いて先入観のない情報を共有していくことがどんなに大切か気づいた」そうです。さらに師長にそれができたのはAさんに関する多くの情報を収集していたことを知り、病棟は多忙でメンバーが情報を得ることは難しいけれど、職員間でしっかり情報共有していくことはとても重要であることを伝えてくれました。

日々の忙しさに立ち止まることもできず、これが看護なのか自信が持てないようなケースでも、看護師として感じる患者さんや看護へのモヤモヤが、実は言葉にはできていないけれどそれぞれの看護師たちの“看護への探求”なのだと感じさせてくれるMさんの事例でした。

～誰もの幸せを願い社会貢献を目指す～
若手社会福祉士のみなさん

社会福祉士のNさん、Yさん、Hさんが参加してくれました。社会福祉士は社会正義のもとすべての人々の幸福を目指し自己研鑽する専門職です。それぞれが自分に与えられた役割のなかでどのようにして社会福祉士の使命を果すかが今後の課題になります。

看護師やリハビリなど専門職としての業務が決まっているのなら目標が明確になりますが、事務職員として日々の業務にあたりながら“いのちの声”を聞けるようになるには少し時間がかかります。

しかし無差別平等の旗をかかげる民医連のもと“事務職員だってソーシャルワーカーだ”という認識で学び、実践することはできます。ここでの学びを生涯こころに刻むことを目指します。

ようこそ！ギャロスへ、共に歩まん！

～どの患者さんにも同じ人間として個性を尊重にできるか～
第2回、第３回で深めていきます

Aさんの事例を通して、私たちにはすべての人々の人権と尊厳を守る使命があることを確認しましたが、そこには大きなモヤモヤも生まれてくることを共有しました。

ならば、どうしたらモヤモヤができにくくなるか、モヤモヤに強くなれるのか、モヤモヤが生まれたストレスを軽くするにはどうしたらいいか、そんなことの答えをみんなで探していくことになりました。

次回はAさんをお呼びする予定でしたが、予定を変更し『生きにくさを抱え、社会的支援の貧しさに苦しむ母、Bさん』をお呼びすることとなりました。社会保障制度の不十分さとそれにかかわる公的支援の未熟さを知り、私たちの役割を考えていきます。

～ギャロス、大満足です！～
純粋な透明感と熱い人間味をあわせもつ、やる気満々のKさん

Kさんは院内の読書会でも常連の新人看護師です。

事例を聞いて「Aさんが『ベッドサイドで他の患者と話しているとカーテンを開けて入ってきて自分の用件を伝えてきた』というところでAさんにグーパンチ、Aさんに怒ってカーテンを閉めてしまうだろうという自分にグーパンチ、そして怒ってしまった自分が嫌になるだろう」と言います。Kさんも看護師としての自分にモヤモヤを感じながら参加してくれました。

そして職場の2つの感動を教えてくれました。

認知症で暴力をふるう患者さんが処置中に先輩看護師を殴ってしまいます。どうなるかと心配していたら、その患者さんが小声で「ごめんね」を言いました。その声を聞きいた先輩看護師と患者さんが一緒に笑い出します。Kさんはこの先輩看護師のような患者さんに温もりのある看護師になりたいと思ったそうです。

また別の容態の悪い患者さんが他の先輩看護師に「私は子供も誰もいない」と悲嘆を訴えます。それに対し「あなたがいるでしょ！」と言った先輩看護師にそんな強い言葉で自分も患者さんを励ませるような看護師になりたいと言います。

若手看護師の初々しい看護への思いを引き延ばすのは先輩看護師の大切な役割であることを感じるKさんのお話でした。これからもたくさん学んで自分の看護観を育ててほしいと願っています。

～Club Gyross 今後の予定～
Part.2（3月）当事者の声を聞く
Part.3（4月）当事者の声からジレンマを再考する
※日程については後日お知らせします
飛び入り参加もOKです
現会員は６名　随時会員募集中！
地域福祉室までご連絡ください、